

## [特別企画3]

「杜の都献血ルームAOBA」における相手に寄り添うことばでの  
呼びかけについて—DJ献血マン出動—

熊谷永遠

宮城県赤十字血液センター

宮城県赤十字血液センター一番町出張所(杜の都献血ルームAOBA)における相手に寄り添うことばを用いた献血呼びかけの様子が、新聞、テレビ、ラジオおよびSNSなどで度々取り上げられ、「DJ献血マン」として県内だけではなく県外でも話題を集めたので紹介する。

私は平成10年に岩手県花巻市で生まれた。中学1年のときに東日本大震災が発災し、間接的な募金活動への協力より、直接被災地へ赴き自分の手で何かできることはないかと考え、1週間後から岩手県陸前高田市および大槌町でボランティア活動を行った。

その後高校に進学し、全国最年少で地域赤十字奉仕団に入団して奉仕団活動に参加した。高校卒業後、医療系の専門学校に進学したが、赤十字活動にもっと深く関わりたいという思いが強くなり、専門学校を1年で退学し、平成29年4月に宮城県赤十字血液センターに入社し、赤十字職員としての道を歩み始めた。

現在は杜の都献血ルームAOBAに配属され、「はたちの献血」ならぬ「はたちの献血ルーム職員」として献血推進に携わっている。その中で、私がなぜ従来の方法を踏襲するだけではなく、「呼びかけの方法を変えてみようと思ったのか」について説明する。

杜の都献血ルームAOBAは、休日を中心に買い物客などが多く行き交うアーケード街に位置している。その反面、平日は通行量は減るものの、仕事などでいつも同じ顔触れの方々が多く繰り返し通ることに着目した。より献血の重要性を相手の心に届けたいと思い、多くの方に耳を傾けていただけるよう、同じ内容の繰り返しではなく、毎

朝ニュースなどで世間の関心の高そうな時事情報を確認し、当日の天気やその場の年齢層および雰囲気なども考慮しながら呼びかけるよう試みた。呼びかけの実演例は次の通りです。

## 【実演例1】

それでは、信号をお待ちの皆様へ献血のご協力をお願いいたします。さっそくではございますが『命』という漢字を頭に思い浮かべてみてください。『命』という漢字は人を一叩きと書きます。皆さんが生まれてから今までずっと叩き続けているものは何でしょうか？恐らく心臓の音かと思います。心臓が止まってしまうと人は終わりを迎えてしまいます。しかし、病気の患者さんは元気な心臓の鼓動と共に明日への命を繋ごうとしております。病気の患者さんにも元気な心臓の鼓動と共に明るい未来を分けてください。

## 【実演例2】

本日は、羽生結弦選手の凱旋パレードを予定しております。たくさんの羽生選手のファンの皆さんが仙台にいらしております。皆さんも羽生選手のファンでいらっしゃいますでしょうか？本日、皆様が凱旋パレードに来ている中、病院のベッドに横になって羽生選手を応援しているファンの方もいらっしゃいます。パレードが終わりましたら命を救うために同じファンのひとりとしてゆづるパワーを献血にもお貸しください。

## 【実演例3】

ワールドカップ日本代表も話題となりました。サッカーはパスをつないでゴールを目指していく

競技ですが、献血でも同じようなことが言えます。病気の患者さんは退院というゴールに向かって今日も病氣と闘っております。みなさんもサッカーのパスのように命のパスを患者さんへ繋いでください。

呼びかけを変えてみると、「おもしろい」「思わ

ず見てしまう」「落語みたいで印象に残る」などとSNSで話題となり、それを知った地元新聞社(河北新報)から取材の申込みを受けた。新聞記事(写真1参照)が掲載されると大きな反響があり、テレビ(NHK)、ラジオ(FM仙台、TBC東北放送)からの取材が相次いだ(写真2および写真3参照)。



Yahoo! ニュースやLINE ニュースなどで全国的に転載された。

写真1 平成30年5月29日(火)付「河北新報」朝刊掲載記事



世界献血者デーのニュースに合わせ、平成30年6月6日(水)夕方の人気情報番組で5分30秒にわたり放送された。また、サッカーのFIFAワールドカップ開催期間中に再度取材を受け、平成30年6月29日(金)に前記【実演例3】の模様が放送された。

写真2 NHK仙台放送局の取材の様子



平成30年8月15日(水)に約10分間生放送された。

写真3 TBC東北放送のラジオ番組に出演

また、私個人が運用をしているTwitterの投稿は、若者を中心に口コミやツイートなどで情報が広まったこともあり、平成30年10月27日現在11,383人の方に閲覧していただき、想像以上に広報効果を実感している。

現在では、通りがかかる方に声をかけていただい

たり、他県から見に来てくださる方がいらしゃったり、献血に関心を持っていただける方は増えていたが、残念ながら安定的な献血者増にはつながっていない。今後もさらに創意工夫を重ね、「DJ献血マン」として献血の普及啓発に努めていきたい。